

明石氏論文に反論する

東京外大教授・中嶋 嶺雄

長の契り——中嶋（ら）と会談した「ことをつんぬんしているが、カーピッツァ氏と私との会談は、明石氏が憶測するような性格のものではない。

去る十二月十四日付本紙の解説論文（軍事評論家・明石一郎氏の「レフチェンコ事件の教訓」）に対し、同論文中「某外語大のN教授」と書かれている個所が自分のことを示唆しているとして、東京外国語大学の中嶋嶺雄教授が反論を本社に寄せた。中嶋氏の反論は次のとおり。



一 明石一郎氏は、「政府当局者と密接な関係にある中国問題の著名な研究者」というレフチェンコ証言から、それを「某外語大のN教授」と記して、明らかに私であることを示唆した解説記事を書いているが、まったくの予断以外の何ものでもなく、明石一郎氏および『世界日報』に嚴重に抗議する。

一 私が日本政府諸機関に専門学者として意見を求められることをもって、「N教授が『J CIA』といわれる内閣調査室の公然エージェントであり」等々のごことを記しているが、このような言い方は、許すことのできない中傷である。

一 私は、過去に五回訪ソしているが、ソ連側によって旅費等を支給されたことはい度もない。「ソ連に招かれ、カピッツァ・ソ連邦外務省第二極東部長（極東第一部

長）の契り——中嶋（ら）と会談した」ことをうんぬんしているが、カーピッツァ氏と私との会談は、明石氏が憶測するような性格のものではない。

カーピッツァ現ソ連外務次官と私との会談は、信頼のおけるソ連の中国研究者であるソ連科学アカデミー東洋学研究所のデリュージン中国部長、同学術情報研究所のクザジャン副所長らとの学術交流のために訪ソした一九七六年二月に、著書『中ソ関係——友好と敵対の二つの十年』でも知られる中国専門家モスクワ大学教授でもあるカーピッツァ・ソ連外務省極東第一部長がたまたま私と専門が同じであるところから、クザジャン氏の仲介でモスクワ市内カリーニン通りのレストラン・プラハで会食し、中国問題等の共通の関心事について語りあったものである。しかも、このときの会談の様様については、私自身、帰国後にいくつかの文章を記しており、最新刊の拙著『中ソ同盟の衝撃』（光文社・カッパ・ビジネス）にも紹介してあるばかりか、当時の在モスクワ日本大使館のスタッフも、在モスクワ日本特派員諸氏も承知している。

一 以上のように、明石一郎氏の解説記事の私にかんする部分は、すべて事実と相違している承服できないものである。

一 なお、いずれ明白になるであろうが、私はレフチェンコ事件とは一切無関係であり、一部の週刊誌が私を名指ししていることはいし、大変迷惑を蒙っているの

一 で、たたいま嚴重に抗議中であることを申し添えた

一九八二年十二月二十日